



研究室訪問

例えば、インドのリキシャ引きの調査——
ミクロからのアプローチで生活向上を支援する

善意だけでは解決できない問題に 開発経済学で立ち向かう

開発経済学は、どうすれば開発途上国に住む人々の生活水準を上げられるかを考えるためのツールです。しかし、生活水準向上に直結した成果を生み出すわけではありません。開発途上国で暮らす人たちに直接ベネフィットを与えているのは、NGOだったり、国境を超える医師団だったりします。それでも私が経済学に惹かれたのは、人の善意だけでは解決できないさまざまな問題、より大きな問題を解決するためには、経済学的アプローチが不可欠だからです。

先週、インドのデリー郊外でリキシャ引きの調査を行いました。リキシャとは人力車に自転車をつけたもの。これは大調査のための予備調査で、80名のリキシャ引きの出身地や仕事に就いた動機、将来の希望、経済状況などを調査しました。この調査により、農村部からの移民のメカニズムを探り、都市部の貧困層の現状を明らかにしようというものです。

経済学的位置づけでは、リキシャ引きは、財産を持たない労働者でありながら、親方からリキシャを借りしているという意味では小さいながら経営者でもあります。どこに顧客がいるかを見抜くことも重要ですし、パンクなどの修理技術も必要です。ビジネスセンスのある人は、資金を貯めて親方になることもあります。また、修理技術を生かして修理工を経て親方にキャリアアップするケースもあります。もっとも、大半はその日暮らしというのが



JICAのプロジェクトの関連で、村の生活向上について意見を交換したパキスタン北西辺境州山岳部の村人と。2005年。



インドの首都デリーの郊外で働くリキシャ引き。2004年。



農村道路の起工式を祝って、県知事にバラの花びらをかける村人たち。パキスタン・パンジャブ州。2005年。



村人の協力で改築された小学校に集まる子供たち。パキスタン北西辺境州。2005年。



村の鍛冶屋に集まり、情報交換する村人たち。パキスタン・パンジャブ州。2005年。

実情です。都会暮らしに疲れると田舎に帰り、またリキシャ引きに復帰するというパターンです。

開発経済学を学ぶ意味は、こうした実態やキャリアアップのパターンを知ることによって、生活向上できる人の割合を増やす手助けができる可能性があるところにあります。

人間がつくる社会の両端にある 南アジアと日本

伝統的な日本の社会では、日本のコミュニティならではの阿吽の呼吸が通用するような信頼関係をベースに、人々が暮らしてきました。ところが、インドやパキスタンなど南アジアの国々では、宗教も違えば言葉も生活習慣も違う人たちが住んでいますから、こうした常識は全く通用しません。「人に道を聞くときは、10人に聞いてその平均値を取れ」と言われるほど対人感覚が違います。

人間のつくる社会には、そう大きな違いはないかもしれません。しかし、日本と南アジアは、その両極に位置していると思えるほど違う面も見られます。日本では集団に合わせることで、個人も集団もメリットを得られる社会を築いてきました。一方の南アジアでは、小集団にこだわり自集団や個人のメリットを追求することで、個人の生存が滅り立つような社会的バランスを築いてきたのです。ですから、驚かされることも数多くあります。

私が長年調査をしてきたパキスタンでも、最近ショックを受けたことがありました。国際協力機構（JICA）のプロジェクトの一部として、ある村で村人を集めて、村で何が必要かを考えてもらいました。我々としては、道路や灌漑用水、診療所、学校…などをイメージしていました。ところが返ってきたのは、「イスラム教の祭礼施設が欲しい」という要望だったのです。その意見を誘導しているのは、宗教的指導者や生活に余裕のある村の有力者たちのようでした。宗教的な要望には誰も反対できないため、社会的な問題を隠してしまう側面がありますから注意が必要です。もちろん、JICAのプロジェクトの主旨である貧しい人たちの生活改善とも違ってしまいます。そこで、「現時点で困っている生活上の課題を改善するのが目的だ」と説得して、納得してもらいました。

村人がこれまで考えていなかったような、ちょっとした変化で生活環境が目に見えてよくなることもあります。例えば、パキスタンの村に道路をつくったときには、これにより教育環境が格段によくなったのです。村には教員がたった一人の小さな学校がありました。天気が悪いと道がぬかるんで先生がこないで、学校は休みです。学校として機能しているとは言い難い状況でした。ところが、道ができたことによって、子どもたちが隣の大きな学校に通えるようになったのです。

経験すればするほど シンドさが増す辛さと面白さ

振り返ってみると、学生時代にインド近現代史を学び、バックパックを背負ってインドを旅して以来、南アジアにベッタリの生活を送っています。行けば行くほど、シンドさが募ってくるような大変な地域です。調査相手は、世界一弁が立つと言われていた民族ですから、地元のインド人の経済学者でさえ「調査は大変だ!」と言っているくらい手強い相手です。それでも、フィールドで現地の人たちと話をするのが楽しくてなりません。

調査に行くと質問を拒否されることはまずありません。ところが、聞いているうちに「おや?」と思うことがあります。回答に矛盾が生じているのです。それでも相手は平気な顔をしています。サービス精神が旺盛というのか、我々がどんな回答を期待しているのかを忖度して答えてくれるのです。現地女性をアシスタントにして質問してもらおうと、まったく違った答えが返ってくることも珍しくはありません。そこで、調査に当たっては現地の研究者と共同研究を行う必要があるのです。

現地では日本製の電気製品や日本車が行き渡っていますから、日本を先進国としてイメージしています。そこで、パキスタンのエリート官僚に、日本の歴史を追って数字や写真でどう課題解決をしてきたかを見せると、彼らは目からウロコが落ちたように驚きます。日本が明治維新や敗戦の焼け野原から復活したように、自分たちもあと数十年で貧困から脱却できると思えるからです。

モデルとしての日本を紹介するのも、日本人の開発経済学者として重要なことと言えるでしょう。(談)

経済研究所教授
黒崎 卓
Takashi Kurosaki

1987年東京大学教養学部教養学科卒。

1995年スタンフォード大学大学院博士課程修了 (Ph.D.取得)。

1987年～1997年アジア経済研究所研究員。

1997年一橋大学経済学研究所助教授を経て2005年より現職。

専門分野は開発経済学、農業経済学、アジア経済論。

著書に「開発のミクロ経済学—理論と実証—」(岩波書店)などがある。

